

臨濟大師の教學的基盤(其三)

今津 洪嶽

正宗 三

現流本臨濟錄一部始終に涉つて、仔細に、大師が援用又は援用せられたりと推定し得べき經論・章疏・偈讚等を點檢すると、經には——異譯を存する經は、總に之を列舉し、中に於て特に大師が援用せられたりと推定し得べき經は、○印を附することとする——

一、大方廣佛華嚴經六十卷	東晉	佛駄跋陀羅譯	佛說大般泥洹經六卷	東晉	法顯譯
○大方廣佛華嚴經八十卷	唐	實叉難陀譯	一、佛說維摩詰經二卷	吳	支謙譯
○大方廣佛華嚴經四十卷	唐	般若譯	○維摩詰所說經三卷	姚秦	鳩摩羅什譯
一、正法華經十卷	西晉	竺法護譯	說無垢稱經六卷	唐	玄奘譯
○妙法蓮華經七卷	姚秦	鳩摩羅什譯	一、○金光明經四卷	北涼	曇無讖譯
添品妙法蓮華經七卷	隋	闍那崛多笈多譯	合部金光明經八卷	隋	寶貴合
一、○大般涅槃經四十卷	北涼	曇無讖譯	金光明最勝王經十卷	唐	義淨譯
大般涅槃經三十六卷	宋	慧嚴等合	一、○楞伽阿跋多羅寶經四卷	劉宋	求那跋陀羅譯

入楞伽經十卷

元魏 菩提留支 譯

一、○大寶積經善住意天子會四卷

隋 達磨笈多 譯

○大乘入楞伽經七卷

唐 實叉難陀 譯

一、○大乘本生心地觀經八卷

唐 般若 譯

一、○大方廣圓覺修多羅了義經一卷

唐 佛陀多羅 譯

一、○佛說彌勒下生成佛經一卷

後秦 鳩摩羅什 譯

一、○大佛頂如來密因修證了義

諸菩薩萬行首楞嚴經十卷

唐 般刺蜜帝 譯

佛說彌勒下生經一卷

西晉 竺法護 譯

一、○金剛般若波羅蜜經一卷

姚秦 鳩摩羅什 譯

佛說彌勒下生成佛經一卷

唐 義淨 譯

一、○金剛般若波羅蜜經一卷

元魏 菩提留支 譯

一、大方廣十輪經八卷

唐 失 譯

一、○金剛般若波羅蜜經一卷

元魏 菩提留支 譯

○大乘大集地藏十輪經十卷

唐 玄奘 譯

一、○佛說鶻掘摩經一卷

西晉 竺法護 譯

○佛說鶻掘摩經一卷

西晉 竺法護 譯

一、○佛說鶻掘摩經一卷

陳 眞諦 譯

佛說鶻掘摩經一卷

西晉 法炬 譯

一、○央掘魔羅經四卷

隋 笈多 譯

○央掘魔羅經四卷

劉宋 求那跋陀羅 譯

佛說能斷金剛般若波羅蜜多經一卷

唐 義淨 譯

等があつて、大乘入楞伽經の採用十六回を最高とし、法華經の十一回、維摩、首楞嚴等の諸經がこれについて居る。

論並に論疏に屬するものに、

一、○大乘起信論一卷 馬鳴菩薩造 梁 眞諦 譯

○金剛般若波羅蜜經論三卷 天親菩薩造 隋 達磨笈多 譯

大乘起信論二卷 馬鳴菩薩造 唐 實叉難陀 譯

○金剛般若波羅蜜經論三卷 天親菩薩造 元魏 菩薩流支 譯

一、○大智度論一百卷 龍樹菩薩造 後秦 鳩摩羅什 譯

一、○瑜伽師地論百卷 彌勒菩薩造 唐 玄奘 譯

一、○金剛般若論二卷 無著菩薩造 隋 達磨笈多 譯

一、○成唯識論十卷 護法等菩薩造 唐 玄奘 譯

金剛般若波羅蜜經論三卷 無著菩薩造

一、○成唯識論述記二十卷 唐 魏 基 撰 一、○入楞伽心玄義一卷 唐 法 藏 撰
 一、○大方廣佛華嚴經疏六十卷 唐 澄 觀 撰 一、○華嚴經合論百二十卷 唐 李 通 玄 論
 等があつて、大乘起信論の援用最も多く、その他は一部を通して、一回乃至數回援用せられて居るに過ぎない。
 祖錄に屬するものに

一、○南宗頓教寶最上乘摩訶般若波羅蜜經六祖惠能 一、○禪宗永嘉集 唐 玄 覺 撰

大師於韶州大梵寺說法壇經一卷 唐 法 海 集 一、○禪源諸詮集都序四卷 唐 宗 密 撰

一、少室六門一卷 一、○傳大士心王銘一卷 一、○牛頭山初祖法融禪師心銘一卷 唐 法 融 撰

心經頌 一、○荷澤神會語錄一卷 一、○百丈懷海禪師語錄一卷 古尊宿語錄第一・第二

○破相論 一、○南嶽懷讓禪師語錄一卷 古尊宿語錄第一

○二種入 一、○馬祖道一禪師語錄一卷 古尊宿語錄第一

○安心法門 一、○五臺山鎮國大師澄觀答皇太子門心要一卷

○悟性論 一、○血脈論 隋 僧 璨 作 唐 澄 觀 撰

一、信心銘一卷 唐 弘 忍 述 一、○越州大珠慧海和尚語

一、○最上乘論一卷 唐 裴 休 集 一、○誌公和尚大乘讚十首

一、○黃檗山斷際禪師傳心法要一卷 唐 裴 休 集 一、○誌公和尚十四科頌

一、○黃檗斷際禪師宛陵錄一卷 唐 玄 覺 撰 一、○南岳懶瓚和尚歌

一、○永嘉證道歌一卷

臨濟大師の教學的基盤(其三)

一、○司空山本淨禪師語

一、○雙峰山曹侯溪寶林傳八卷

等がある。中に於て、黃檗の傳心法要並に宛陵錄の援引最も多く、少室六門集の中、悟性論、血脉論、破相論これにつき、寶誌の大乗讚、十四科頌、信心銘、證道歌等、又幾回と無く援用せられて居る。

従上來は、——寶林傳に依る第八祖佛陀難提、第十五祖迦那提婆、第二十二祖摩拏羅の諸祖の偈頌を、前二祖は其の語の如何なる古德に出でたるを指示すること無く、たゞ漫然と示衆中に援用せられ居るに對し、摩拏羅の偈は「古人云」
として援用せられて居る。援用の文を検するに、佛陀難提の説偈は、全文寶林傳の所傳と同一であるが、餘の二祖の説偈は、字句に於て多少の差異あり、却つて、景德傳燈錄の所傳と合する。祖堂集の所傳また文字を異にし、迦那提婆の説偈を缺く。従つて臨濟大師の所覽は、景德傳燈錄の所傳と系統を同じくするものと考へられるも、今は暫く現傳の類書中、所出の古きに從つて寶林傳としてこれを出す——一部の始終を通して、或は「釋尊云」、或は「古人云」等として、その自意に依るにあらざること明示せられる援用もあるが、大部分は取意又は換骨脱體した援用で、極めて嚴密着細なる點檢を加ふるにあらざれば、その出典を明著にする能はざるは、何人も容易に首肯し得ること、考へる。或は多少の見落しがあるかも知れない。敢て博雅の大家の示教を冀ふとともに、後日の研究を期する所以である。

翻つて、これを前に既に指摘した各種の文獻の所傳、並に推論の歸結と合考するに、大師が、その初め華嚴を宗として清涼大師澄觀、又はその門下の諸德——圭峰宗密、東都僧叡、海岸寶印、寂光——のうちの何人かに師事して、瑜伽、唯識の諸教學を究められたと傳へるのは——近くは祖堂集——蓋し歴史的事實であらう。又、恐くは清涼澄觀に師事して、落髮受具し——十二歳前後より二十歳又は二十歳以後まで——後は圭峰宗密に師事して、その講肆に列し、その室に入り、博く經論の奥旨を究むると俱に、禪律の妙處を探られしこと、推定し得ると信ずる。

廣く經論・章疏・偈讚の諸方面にわたる援用と、一化を通じての教學的背景を爲すと推せられる諸教學とを綜合要

約して、その特に指摘すべき要點は、

(一) 全般的には、正しく杜順禪師法順を以て始祖とし、至相大師智儼これを稟け、賢首大師法藏に至りてこれを大成し、靜法寺慧苑及び天竺寺法詵を経て、清涼澄觀に至りし華嚴教學を以て基盤となしつつも、傍ら澄觀及びその神足宗密に依りて、三論・法相・天台及び律の諸教學を修め、その師承は詳かになし得ざるも、善無畏、一行、不空等の相傳にかゝる秘密佛敎にまでも通ぜられしこと。

(二) 楞伽、法華、涅槃等の諸經、並に起信論の援用は多くの回數を重ね、特に初祖菩提達摩が、二祖慧可に、楞伽經四卷あり、仁者依行せよ、自然に度脫せんと付囑せられたと傳へられる楞伽經は、最も多く回數を重ねて援かれて居る。

(三) 宋代以來、初祖の作と傳へられる少室六門集のうち、破相論——大正藏第八十五套に收むる煥煌出土スタイン蒐集本及びペリオ蒐集本に依る觀心論は、この論の一異本で、法を六祖に得たる神秀上座の著作と傳唱される、禪門撮要上卷所收の觀心論には撰號を安して初祖達摩大師説とあり——悟性論、血脈論——禪門撮要上卷所收本には、初祖達摩大師説と安す——の三論を初め、曹溪、南嶽と嗣承する列祖の語録又は語要、特に黃檗の傳心法要及び宛陵錄を隨處に活用せること。

(四) 牛頭法融の心銘及び荷澤神會の語要を援用し、特に神會に對しては、「祖師云」と牒して、その語録中の語を援用する點である。

この特に注意さるべき四點のうち、第一點に就ては、別に項を設けて、説明することにした。第二の楞伽經の援用は、流布本臨濟錄中、隨處にこれを見るも、特に示衆十四章中、第十四章五無間業の示衆は、大乘諸經論のうちただ楞伽經にのみ見られる獨自の法相で、即ち楞伽阿跋多羅寶經第三・一切佛語心品——それに相當する楞伽經第五・佛心品及び大乘入楞伽經第四無常品——の所説に依る此經の特色の一をなすものである。由來楞伽經は、前に指摘したやうに初祖以來甚深の因縁あり——禪學研究第四十五號序説二に詳説——二祖慧可、三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍等多くそ

の教學的基盤を此の經に置き、六祖慧能の下、北宗の神秀は、壽山玄蹟に依りて楞伽人法志に紀傳せられ、玄蹟の徒淨覺は、師の意を繼承して、楞伽師資記を著し、楞伽人法志を援引して、楞伽中心の傳燈を明かにし、また宋高僧傳第五に依ると、清涼にも楞伽經の疏若干卷の著ありしことを傳へて居る。諸嗣宗脈記に楞伽一乘宗として系譜を掲載せる又參考さるべきであらう。案ずるに楞伽經の五無間業の説は、初祖の作と傳ふる少室六門集所收の悟悟論——禪學研究第四十五號序説「參照——に五無間業中の殺父・殺母の二無間業の文を援いて「以無明爲父。貪愛爲母」といひ、百丈錄中にも見えて居る。我が大師の援用と並せ考ふべきであらう。

第三の初祖以下、黃檗に至る正脈の列祖の語録又は語要及び撰者の援用は、その正脈嫡傳として師承せられた必然の歸結として、特に詳細の説明を要しないが、然しこれに依りても、大師が六祖、南嶽と師承した黃檗の眞子であることは、充分に證明し得られるとともに、大師の所謂正法眼藏の妙諦はこゝに存し、次下に至りて次第に鮮明せられる如く、隋唐佛教の諸教派の總ては、これに依りて統攝融會せられ、畫龍點睛せられ、四祖道信以來次第に派生分流した初祖の法脈は、これに依りて復原歸一せられ、即ち初祖、二祖、三祖、四祖と嫡傳師承した正傳の佛法は、大師に至りて、うたゞ明著にせられたと考へ得よう。

第四の牛頭法融の心銘及び荷澤神會の語要を援用し、特に神會の語を「祖師云」として援用せられて居るのは、大師が清涼と宗密とを通じて、荷澤神會の禪を師承せられたことを示すもので——本録に「祖師云。彌若住心看靜。擧心外照。攝心內澄。擬心入定。如是之流。皆是造作。」云々と見ゆる、大智實統の首書増補臨濟錄三眼國土章の首書に、初祖の破相論に見える類文を援引して、「大意取此文。祖師者指達磨乎」と指摘する如く、破相論に「攝心內照。覺觀外明」云云と、ほとゝ類文を發見し得るが、燉煌出土神會語録に、「若有坐者。擬心入定。住心看靜。起心外照。攝心內澄者」云云と見えて、即ち字句の順次に、一二の左右はあるが、完全に類文を發見し得る事實に依

つて、「祖師云」の語は、神會を指すと解するが妥當であらう。牛頭法融の心銘は、尠くとも四回又はそれ以上に授用せられ、大通智勝佛の話は、牛頭智威の徒・天柱崇慧に、祖師西來意の話は、同じく鶴林玄素にその端を發するが如き、即ち大師が清凉、宗密等に依りて、牛頭と荷澤の宗旨を傳承せられたことを傍證するものなりと考へ得よう。

正宗 四

本録示衆第二章に、即今目前聽法底の人に即して、法・報・化三身の深義を開示し、次で經論家の所説を評して「據_三經論家_一。取_三三種身_二爲_レ極則。約_三山僧見處_二不_レ然。此三種身是名言。亦是三種依。古人云。身依_レ義立。土據_レ體論。法性身法性土。明知是光影」と説かれて居る。爰に經論家と指摘されたのは、唯識法相の教學を意味することには云ふまでもなく、即ち成唯識論卷十に、三身所依の土を分別する一段に、「自性身依_レ法性土。雖_レ此身土體無_レ差別、而屬_レ佛法、相性異故。此佛身土俱非_レ色攝。雖_レ不_レ可_レ說_レ形量小大。然隨_レ事相_レ其量無_レ邊。譬如_レ虛空遍_レ一切處」と説き、これを慈恩の述記第二十一には、「法身亦名_レ自性身。法性土者、以_レ屬_レ佛・法。相性異故。以_レ佛義是相。謂有爲功德法所依故。衆德聚義故。二身自體故。法是性義。功德自性故。能持_レ自性_二故。諸法自性故。躰爲_レ土義爲_レ身」と釋し、大乘法苑義林章第七佛土章には、「自性身土即眞如理。雖_レ此身土體無_レ差別、而屬_レ佛・法。相性異故。以_レ義相_レ爲_レ身。以_レ體性_レ爲_レ土。以_レ覺相_レ爲_レ身。以_レ法性_レ爲_レ土。體具_レ恒沙眞理功德。此佛身土俱非_レ色攝。非_レ心心所。但依_レ一如差別義_レ説」と判ずる。大師の前に出た評破は、恐くは此の釋を破し、經論家とは、慈恩を初め、その門下の惠沼、智周等の敎家義學の諸德を指すと考へられるが、清凉が華嚴敎學の正脉を傳承して、賢首法藏に依る華嚴と唯識との和會融合、即ち所謂の性相融會の立場より、更に歩一步を進めて、近く華嚴經玄談第五に見ゆるが如く、性・相の二宗に十門の差別ありとして、相宗は五性の各別なるを説くも、佛法の普遍を知らず、眞如の凝然を知り

て、隨縁を知らず、遍・依・圓の三性各離の空有を明すも、未だ相即無碍の空有を知らず等と明して、これ等を總に大乘始門の權教たる所なりと斷じて性・相決判の擧に出でられたる、もとより唯識並に攝論の教學に精通するに非ざれば爲し得ざるところ、不幸にしてその師承を明かに爲し得ざるは、誠に遺憾に堪えない。

宗密が親しく清涼に師事して、専ら華嚴を學び傍ら諸宗の教學を究められたるは、その高著圓覺經略疏鈔第一、同大疏鈔第一之下、二之上下等に明記するところ、而してそれ等には並に唯識本頌疏二卷を撰述したことが述べられて居る。即ち我が大師は、涼・密の二師に就て、瑜伽・唯識の教學を修められ、大愚和尚の面前で、初相見の時なるに係らず、堂々と瑜伽を論じ、唯識を諱するまでの識見を持つに至られしものと推せられる。

馬防の本録の序中に、「三要三玄鈴鎚柄子」と推獎した三玄三要の妙諦は、法を六祖に嗣ぐ永嘉玄覺——天台の教學は、天台智顛、灌頂章安、智威と師承せる慧威に稟けて、左溪の玄朗と同學である——の永嘉集所明の觀心十門の第一言法爾者の下に、「夫心性虛通。動靜之源莫二。眞如絕慮。緣計之念非殊。內至是以三諦一境。法身之理常清。三智一心。般若之明常照。境智冥合。解脫之慮隨機。非縱非橫。圓伊之道玄會。故知。三德妙性。宛爾無乖。一心深廣難思。何出要而非路。是以卽心爲道者。可謂尋流而得源」と見て、基くところは、菩薩瓔珞本業經卷上・賢聖學觀品、仁王般若波羅密經卷上・二諦品。近くは龍樹の中論第四・觀四諦品に、「衆因緣生法、我說卽是無、亦爲是假名、亦是中道義」の偈に基く——三論・四論の教學では三是偈。天台智顛の教學では三卽偈又は三諦偈と稱する——天台の法華經玄義第二下に有諦・無諦・第一義諦又は卽空卽假卽中の三諦圓融の宗旨を承けたものと推せられるが、華嚴教學の大成者賢首は、龍樹、伽那提婆、羅睺羅跋陀羅の中觀派の三師より、清辨、智光と相承して十二門論を譯出せし地婆伽羅卽ち日照より、新三論の義を稟けて、十二門論宗致義記二卷の著あるうへに、清涼は金陵の玄壁に従つて關河の三論、即ち、鳩摩羅什乃至道朗、僧詮、法朗、嘉祥と相承せし古三論を傳へて江南の地にその法門を盛にし、更に

成都の慧量より重ねて三論を承け、中論疏の作すらあつたと傳へる。清涼又天台の學に通じ、荆溪堪然に侍して天台の止觀・法華・維摩等の疏を學んだことは何人も知るところである。斯くて我が大師の教學的基盤として三論・四論及び天台の教學に影響さるゝものあるは當然であらう。

本録の上堂九章のうち、第九章に古來臨濟の三句を以て稱せられる提唱が收められ、示衆第十一章にも三句の商量がある。由來三句の説は、玉泉神秀より、嵩山普寂、益州無相と嗣承した無相の始唱に係り、即ち無相は、初祖大師所傳の宗旨として、「無憶是戒。無念是定。莫妄是慧。此三句語即是總持門、念不起是戒門。念不起是慧門。無念即是戒定慧具足。過去未來現在恒沙諸佛。皆從此門入。若更有別門、無有是處」と説示したと云はれる。保唐無住これを承け「一心不生具戒定慧。非一非三」と無念爲宗の宗旨を擧揚した——莫妄の妄、宗密は忘に作るも、無住は法句經の「若起精進心、是妄非精進」の文を擧げて、妄の字に依るべきことを杜濶漸に答へて居る——六祖下に於ても、三句の宗旨は重視せられ、百丈は「但人法俱泯。人法俱絕。人法俱空。透三句外。是名不墮諸數。人者是信。法者是戒施聞慧等」と、人法俱泯、人法俱絶、人法俱空の三句を初め、百丈独自の提唱あり、古尊宿語録第一所收の語録にも、三句に關する垂示が、七回にまで及んでゐる。無相には無相底の三句があり、百丈には百丈底の三句があり。大師に臨濟底の三句のあるべきは、當然であらう。

寶壽延沼謹書興化存獎の校勘に係る塔記に大師は「精究毗尼」と云ひ、行録に「行業純一」と見える。凡そ唐代の諸先徳は、其の宗其所承の如何に係らず、滿二十歳又はその前後に具足戒を裏けられ、戒珠玲瓏玉の如く、眞に欽仰すべきものであつたことは、「正宗一」に於て解説した通りである。案ずるに大師は、その所學の華嚴教學史の面に於ては、毘尼は四分律疏十卷、四分僧羯磨三卷、四分尼羯磨三卷の著者・恒濟寺懷素に就て東塔宗を裏け、梵網經疏三卷を著した賢首法藏の系脉に屬し、清涼は潤州樓霞寺の體律師及び四分律發正記十卷の著者越州開元寺曇一に

侍して、相部宗を承け、四分律疏若干卷、華嚴受菩薩心戒一卷を撰述した外に、更に荊溪堪然に依る天台戒の影響も合せ考ふべきであらう。圓覺經略疏鈔第二に依ると、宗密には四分律疏三卷の著がある。即ち大師は、涼・密の二師に就て、四分律を攻め、大覺寺慧光、懷素と相承する東塔宗と、大興善寺洪遵、洪淵、法礪と資承せる相部宗との兩系を承けられたこと、推察せられる。

大覺寺慧光は、世に光統律師と稱し、地論の宗祖、四分律宗の祖師である。華嚴經疏十卷、同略疏四卷、入法界品鈔一卷及び十地經疏若干卷の作があり、その漸・頓・圓三教の判釋は、賢首の小・始・終・頓・圓の五教の判釋の因由龜鏡となつたものである。律藏に關しても、四分律疏及び大乘義律章若干卷の作あり、僧制十六條の撰述あり、佛陀禪師の室に入りて、禪の妙諦を究めたことも忘れてはならない。洪遵にも華嚴疏七卷の著あり、これ等は並に涼・密兩師を通じて、我が大師に一脉のつながりの存することはもとよりである。

便宜のため涼・密兩師を通した大師の禪法相承を圖示すると、大體に於て次の如きものと考へる。



